

Title : P-187 軽度三角頭蓋と頭蓋内圧 : 56 症例の報告

Subtitle : 第 46 回 日本小児神経学会総会 一般演題

Authors : 下地武義, 島袋智志

Authors (kana) :

Organization : 沖縄県立那覇病院脳神経外科

Journal : 脳と発達

Volume : 36

Number :

Page : 5330

Year/Month : 2004 / 6

Article : 抄録

Publisher : 日本小児神経学会

Abstract : 56 例(44 男児、12 女児)の mild trigonocephaly の患児に、術中、頭蓋内圧(ICP)の測定を行ったので、この結果と臨床症状の改善に關与する因子を報告したい。全ての患児において術中に頭蓋内圧(ICP)の測定を行った。全例 nonsyndromic type で染色体異常の無い症例である。言語発達遅滞、多動、自閉傾向、自傷行為、運動発達遅滞、頭痛などの症状を呈していた。1 例を除き精神遅滞の症例である。年齢は 2 歳から 8 歳で平均年齢は 5.1 歳である。頭蓋内圧は、全身麻酔下で burr hole を開け右前頭葉の硬膜外にセンサーを置き、測定した。1 回目は PCO₂ を 30mmHg 前後で、2 回目は PCO₂ を 40mmHg(normocapnea)前後で測定した。1 回目の測定は、PCO₂ が 29.1mmHg で、mean ICP は 13.3mmHg で、2 回目の測定では、PCO₂ が 38.2mmHg で mean ICP は 19.8mmHg であった。これらの結果は、この年齢の平均値よりかなり高い値であった。圧波は 1 回目 mean で 7.1mmHg、2 回目で 8.5mmHg であった。この結果も正常平均値よりかなり高く、頭蓋内の compliance が低いことを示している。手術は頭蓋底を含む減圧的頭蓋形成術を行った。術後、全例に MRI や CT で前頭葉や前頭蓋窩の拡大を見た。臨床症状は、30 例は markedly に改善、22 例は、slightly に、4 例は全く改善を見なかった。予後を良好にする因子は、1, 低年齢、2, 比較的高い DQ、3, 著明な指圧痕、4, 前頭葉の血流低下(SPECT)、5, moderate degree の症例などである。MR の患児の中に、高率に臨床症状を持つ軽度の三角頭蓋が存在し、これらの症例は頭蓋内圧が高く、減圧的頭蓋形成術有効と考えられた。

Practice : 臨床医学 : 内科系